

Haidt の 社会的直観者モデルについての一考察

—モデルが道徳性研究に与える影響と
これからの道徳性研究の方向性—

寺井 朋子

目次

はじめに

社会的直観者モデル

社会的直観者モデルの構成要素

直観の機構

社会的直観者モデルが引き起こした新しい流れ

まとめ

キーワード：道徳的判断、Haidt、Social Intuitionist Model、直観、
道徳的ジレンマ

はじめに

現在、道徳性やモラルという言葉がさかんに聞かれる。その中には電車内でのマナーやごみのポイ捨てなどの身近な問題がある。また、図書館の本を返さなかったり、救急車をタクシーのように使ったり、障害者手帳を不正に取得したりするなどの、公共システムを脅かす日本の社会全体に深く影響する問題もある。このようなさまざまな問題の原因は、特定しやすい一部の人に限定することができず、年齢や性別や地域に関係なく生じているため、問題の解決がさらに困難になっていると思われる。本稿は、このような事態の解決の一助となると考

えられる心理学的道徳性研究における1つのモデルを紹介し、道徳性研究の方向性を模索するものである。

これまでの心理学における道徳性研究は、認知的側面（道徳的判断）、行動的側面、情緒的側面の3側面から研究されているとするものが多い（高橋，1988）。その中でも特に、PiagetやKohlbergを中心とした認知的側面を重視した研究が主流であるといえる。

しかし、Haidt（2001）は、社会的直観者モデル（Social Intuitionist Model: Intuitionist を直観者とするか直感者とするか Intuitionistのままにするかについては議論もあると思われるが、ここでは辞書どおりに社会的直観者モデルと呼ぶこととする）を提唱し、それまでの道徳性心理学が道徳的推論に過度に依存してきたと主張している。この論文は、2008年7月までの7年ほどの間に論文検索 PsycINFO で264回引用されていることから多くの議論を巻き起こしているといえる。ここでは、Haidtの社会的直観者モデルを概観し、Haidtの発表した雑誌と同じ雑誌で反論を行った Pizarro and Bloom（2003）も含めて、この考え方が従来の道徳性研究に与える影響と研究の方向性について考察する。

社会的直観者モデル

Haidtの主張する社会的直観者モデルは、道徳的判断は道徳的直観によって引き起こされ、必要ならばそのあとに理由付けとしての道徳的推論が続くとするものである。つまり道徳的推論は、判断後にそれを正当化する理由を探る“弁護士”となるという（Figure 1）のである。一方、彼によるとこれまでの道徳性心理学研究では、道徳的判断を行う前に、道徳的推論が“裁判官”として損害や権利について考察するとして位置づけられており、道徳的判断の理性論者モデル（Rationalist Model of Moral Judgment）と呼ばれている（Figure 2）。

Haidtによると、社会的直観者モデルは「理由は分からないが何かが悪いことは分かる」状態を説明できるという。Haidtは論文の冒頭

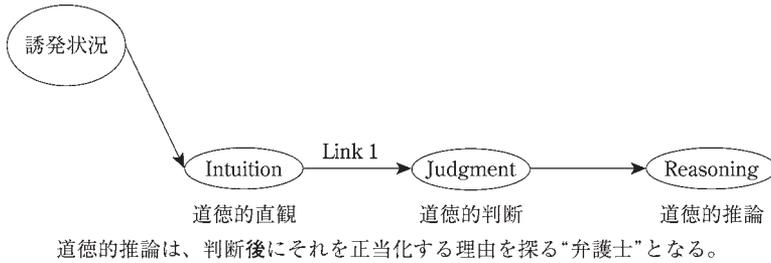
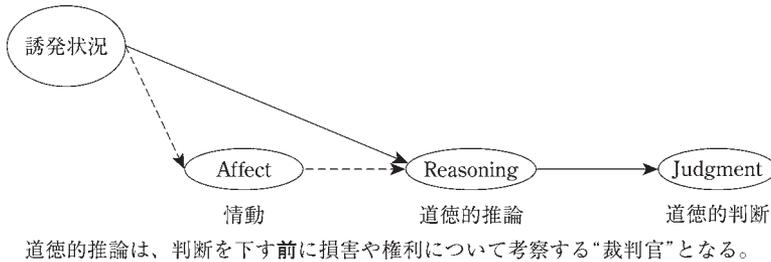


Figure 1 Haidt が提唱した社会的直観者モデル
(寺井が本研究のために簡略化して図示したもの)



道徳的判断：人の行為や性質への価値付け（良いか悪いか）。
道徳的推論：道徳的判断に至るまでの意識的な心的活動。

Figure 2 従来の道徳的判断の理性論者モデル
(寺井が本研究のために簡略化して図示したもの)

で、我々がそのように感じる状態の具体例を挙げている。

<理由は分からないが悪いことは分かる状態の具体例>

ジュリーとマークはきょうだいである。彼らは大学の夏休み中にフランスへ旅行に行っている。ある夜、彼らは海のそばのキャビンで過ごしている。彼らは、もしも自分たちが性的交渉を持とうとしたら、興味深く楽しいだろうと思う。少なくとも、お互いにとって新しい経験にはなるだろう。ジュリーはすでに経口避妊薬を使用しているが、安全のためにマークも避妊具を使用する。彼らはお互いに性的交渉を楽しむが、再びこのようなことをしな

いと決める。彼らはその夜のことは特別な秘密にして、お互いのごく親しい人にさえ秘密にする。あなたは、このことについてどのように感じますか？ 彼らが性的交渉を持つことを許容できましたか？ (Haidt, 2001)

これに続けて Haidt は、多くの人々は即座に「これは悪いことである」と言うと言っている。そして、その後に彼らはその理由を探し始め、様々な理由を挙げるが、結局は「なぜ悪いのかは説明できないが、悪いことはわかる」というようなことを答えるだろうと述べている。このような、「理由は分からないが悪いことは分かる」という道徳的判断を説明するモデルは現段階ではないのではないかと言い、社会的直観者モデルであれば「理由は分からないし、説明も出来ない。しかし、それが悪いことは分かる」という状態を説明できると主張している。

社会的直観者モデルの構成要素

社会的直観者モデルの中心的主張は、道徳的判断 (moral judgment) は素早い道徳的直観 (moral intuition) と、そのあとに続くゆっくりとした道徳的推論 (moral reasoning) から引き起こされるというものである。

Haidt はこれまでの研究で用いられている道徳的判断・道徳的推論・道徳的直観を以下のようにまとめている (Haidt, 2001)。

1. 道徳的判断は、ある人の行為や特性の価値 (良いか悪いか) を定義することである。これは文化や下位文化によって、強制的に持たされている一連の価値観を重視することから作られる。
2. 道徳的推論は、道徳的判断にたどりつくために、人々について与えられた情報を変化させることから成り立つ意識的な心的活動である。
3. 道徳的直観は、良い悪いや好き嫌いなどの感情的バランスを含

む道徳的判断の意識の中で、突然現れるものである。道徳的直観には、証拠を探したり証拠の重みを考えたり、結論を推測したりする段階を通じて過ぎ去ったあらゆる意識的な気付きは含まれない。

上記の3に述べられたように、Haidt は道徳的直観について、その特徴を「意識的でないこと」と「突然で素早く生じること」としている。これらの特徴を整理すると Table 1 のようにまとめられる。

Table 1 道徳的直観システムと道徳的推論システム相違点
(Haidt, 2001 を寺井が改変したもの)

道徳的直観システム	道徳的推論システム
素早く生じ、努力を要しない	ゆっくりと生じ、努力を要する
過程は意図的ではなく、自動的に進む	過程は意図的であり、制御可能
注意した資源を要求しない	制限された注意した資源を要求する
すべての哺乳類に共通	2歳以上の人間に特有。おそらく、ある言語的に訓練された類人猿のみ

直観の機構

直観は社会的直観者モデルの中心的考え方であるので、どのようにして道徳的直観から道徳性が生じるのかについてさらに述べなくてはならないとし、Haidt は、直観のメカニズムについて、身体的経験の重要性に関する最近の研究をレビューしている。このうち、ここでは、本能的感情、電車ジレンマを用いた研究を中心に直観の機構について概観する。

(1) 本能的感情

Haidt は、「世界で起こっている経験は、普通、身体変化と感情を含めた感情経験の引き金となる」とするダマシオ (2000) のソマティックマーカー仮説を社会的直観者モデルの基礎としてあげている。ソマティックマーカー仮説とは、緊急場面に直面した時、我々は過去の

感情体験によって自動的にその状況に沿った行動をとるというものである。そのため、我々は緊急時に膨大な選択肢から行動を選ぶ負担を減少させていると考えられている。Haidt は、この Damasio のモデルは社会心理学で研究されている「affect as information (情報としての感情) 仮説」ともよく適合していると述べている。この仮説は、人々は判断や決定を行うときに、自分の心的状態や瞬間的なひらめきに頻繁に頼っているというものである。このような生得的なメカニズムが我々の中にあるとする考え方はこれまでの道徳的モデルではなかったものといえよう。彼はさらに、Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001) の fMRI (機能的磁気共鳴画像法) を用いた道徳的判断の研究結果も社会的直観者モデルを支持するものとして挙げている。ここで Greene らの研究について述べるが、その前に Greene et al. (2001) と同じように電車ジレンマを用いて道徳的判断について検討を加えた Hauser (2007) の研究をみとめることにしたい。Hauser の研究は、電車ジレンマを提示してそれが許されるかどうかを尋ねたシンプルなものなので分かりやすいとともに、道徳的判断が意識的な推論からだけで成立するものではないことを示唆していることから社会的直観者モデルにとっても意義あるものと考えられる。

(2) 電車ジレンマを用いた研究

Hauser (2007) の研究

道徳哲学でよく知られている電車ジレンマについて、Hauser (2007) は、インターネットを使った大規模な調査を行った。調査には英語を母国語としている120カ国5000人が回答した。このとき、Hauser は4種類の電車が制御不能となったシナリオを示し、道徳的に許容される行動であると思うかどうかを尋ねている。

シナリオ1：このままでは電車が直進して、線路上の5人が死亡す

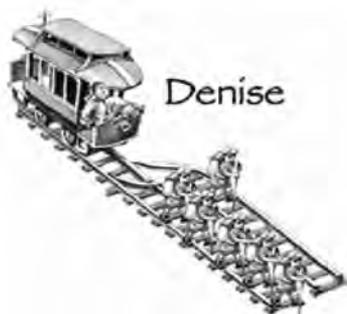


Figure 3 シナリオ 1 85%が許容
(Hauser, 2007より)



Figure 4 シナリオ 2 12%が許容
(Hauser, 2007より)

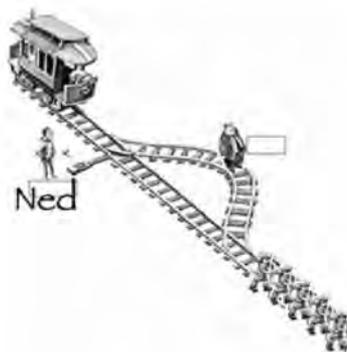


Figure 5 シナリオ 3 56%が許容
(Hauser, 2007より)



Figure 6 シナリオ 4 72%が許容
(Hauser, 2007より)

る場面である。運転手は失神している。乗客の Denise は、5 人を救うために死者が 1 人だけとなる線路の方向に電車を切り替えても道徳的に許されるか否か (Figure 3)。

シナリオ 2 : Frank が橋の上に見知らぬ太った人と並んでいる場面である。電車は重いもので止まることはみんな知っている。彼が、線路上の 5 人を助けるために横に立つ

ている人を橋の上から突き落とすことは許されるか否か (Figure 4)。

シナリオ3：Nedが方向切り替えポイントにいる場面である。このままでは線路上の5人が死亡してしまう。Nedは1人が歩いている線路の方に電車の進行方向を変えて、その人で電車を止めることは許されるか否か (Figure 5)。

シナリオ4：Oscarが方向切り替えポイントにいる場面である。このままでは線路上の5人が死亡する。重い物がある方向にポイントを切り替えたら5人が助かる。しかし、その前には1人の人がいる。彼が方向を切り替えることは許されるか否か (Figure 6)。

その結果、道徳的に許されると答えた人は、シナリオ1では85%、シナリオ2では12%、シナリオ3では56%、シナリオ4では72%となった。そして、シナリオ1・2をセットにし、シナリオ3・4をセットにして考えると、どの民族、宗教、性別、年齢、学歴であっても、シナリオ1は2よりも許されるとされ、シナリオ4は3よりも許されるようになった。しかし、なぜシナリオ1や4は許されやすく、シナリオ2や3は許されにくいのかという理由についてはほとんどの人が説明できなかった。Hauserは、このような結果は、道徳的判断は意識的な推論から成り立っているとする従来の考え方では説明しにくい現象であると述べ、理由が説明できない何かが道徳的判断をさせているのであると主張している。

Greene et al. (2001) の研究

次に、先ほど挙げたfMRIを用いて道徳的判断の研究を行ったGreene et al. (2001) について検討してみる。Haidtは、彼らの結果は道徳的ジレンマ場面に対する人々の反応にひらめきが影響していることが示唆されると述べている。

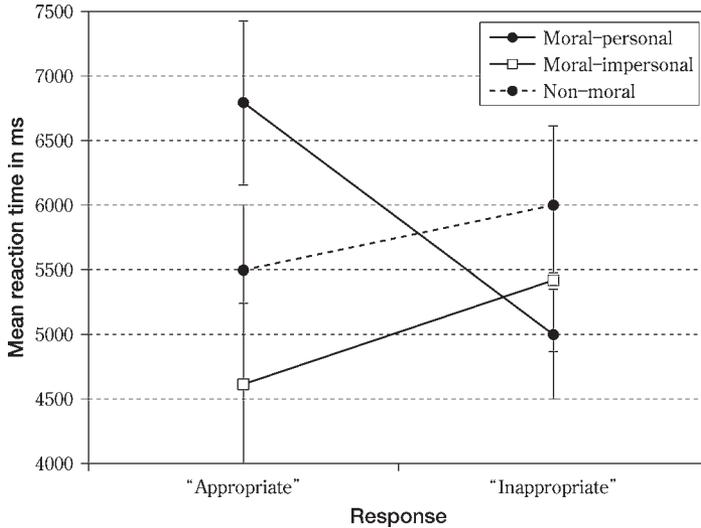


Figure 7 MP、MIP、NM 条件における反応時間 (Hauser, 2007 より)

Table 2 Greene et al. (2001) におけるジレンマ課題

モラルジレンマ	モラルパーソナル条件 (陸橋ジレンマと同種)
	主観的で個人の感情が深く関わるジレンマ (MP 条件) (例) 5 人の人に分けるために 1 人の人の臓器を盗むこと 沈没しかかっている船から人々を投げ落とすこと
ジレンマ	モラルインパーソナル条件 (トロリージレンマと同種)
	個人の感情があまり関わらないジレンマ (MI 条件) (例) 落とし物の財布から見つけたお金を持っておくこと より多くの死者を出す政策に賛成票を入れること
ジレンマ	非モラルが関わらないジレンマ (NM 条件) (例) 旅行にバスで行くか電車で行くか考えること

Greene et al. の電車ジレンマは、(1) トロリージレンマと (2) 陸橋ジレンマの大きく2つに分けられていた。まず、(1) トロリージレンマであるが「走ってくる電車があり、そのまますすめば5人の人が死んでしまう。彼らを救える唯一の方法は、別方向に電車を向けるスイッチを押すことであるが、5人の人が助かる代わりにそこにいる1人の人が死んでしまう。1人の犠牲の上で5人の人を救うために、あなたは電車の方向を変えるべきでしょうか」というものである。この場合、ほとんどの人はYESと答えるとGreeneは言う。一方、(2) 陸橋ジレンマとは、「電車が進めば5人の人が死んでしまう。あなたは、陸橋の上で大柄の見知らぬ人と立っていた。そこは、進んでくる電車と5人の人の間の場所であった。このシナリオでは、5人の人々を救うため、この見知らぬ人を橋の上から下の線路へ落とすことが唯一の方法であった。あなたがもしもそのようなことをしたら、彼は死んでしまうだろう。しかし、彼の身体は電車を止めて他の5人の命を救うだろう。あなたは、この見知らぬ人を押して死なせて5人の人を助けるべきでしょうか」というものである。この場合は、ほとんどの人々はNOと答えるとGreeneは言う。Greeneは、トロリージレンマと陸橋ジレンマの決定的な違いは、陸橋ジレンマは人々の感情に関係しているがトロリージレンマはそうではないと予測し、感情的な差異が道徳的判断に影響していると考えた。そして、感情と道徳的判断の関係を、fMRIと「適切かそうではないか」を答えるまでの反応時間から調べている。

彼らは60種類のジレンマ課題を作成した。それらは、予備調査において、モラルジレンマと非モラルジレンマ (NM条件) に分けられていた。また、モラルジレンマは2人の人によってモラルパーソナル条件 (以下MP条件) とモラルインパーソナル条件 (以下MI条件) に分けられた (Table 2)。MP条件のジレンマは、陸橋ジレンマのように主観的でそこから引き起こされる感情が深く関係するとされるジレンマであった。一方、MI条件のジレンマはトロリージレンマのよ

うに個人の感情を含めないジレンマであった。

彼らの研究結果を要約すると以下ようになる。MP 条件の時に他の条件と比べて、脳が最も活動していた。また、MP 条件に対して、「適切だ」と答えるときにより長い時間がかかっていた (Figure 7)。これは、判断時に感情的妨害を受け、それに対する処理が伴う処理が必要となるので、「MP 条件を適切だ」と言うときは時間がかかるだろうという予測と一致していた。つまり、MP 条件と、MI・NM 条件の間には重大な違いあることが分かった。

これらの結果から、MI 条件の道徳的ジレンマに関する判断は、MP 条件の道徳的ジレンマよりも非モラルジレンマとより似ている傾向がみられた。これまでの心理学で使われてきた道徳的ジレンマは、MI タイプの道徳的ジレンマ場面であったことから、Greene はこれまで扱われてきた道徳的ジレンマの結果は、非モラルジレンマ即ち道徳的判断とは異なる場面の判断ではなかったのかと議論している。

(3) その他の研究

上述してきたように、電車ジレンマを使った2つの研究結果は、道徳的判断は理論的な推論からだけではなく、感情的・直観的で言葉では説明できない要因からも影響を与えられていることが推察される。Haidt は、このことを示すために、さらにソマティックマーカーを操作することによって、直接的に道徳的判断を扱っている2つの研究を紹介している。彼は、自由か平等かの価値を扱った話を聞かせるときに、自分の感情反応について被験者に誤った生理学的フィードバックを行った Baston, Engel and Fridell (1999) を引用し、被験者が、生理的指標によって彼ら自身がより強く直観的な反応を示していると聞いた価値を選ぶ傾向にあったとしている。このことは、脳内のマーカーが判断と何らかの関係を持っていることを示唆していると考えられるものである。Haidt は、Wheatley & Haidt (2001) の研究を引用し、さらに議論を行っている。被験者は、催眠術下で、take か often

という言葉を見たときに嫌悪で苦痛の感情を受けるように睡眠教示された。この後、被験者は6つの話を読んで、道徳的判断をするように依頼された。その話は、適度の嫌悪感を引き出すように構成されており、takeかoftenの単語が含まれている話が混じっていた。被験者は、その2語が入った話については、より高い割合で嫌悪感と道徳的非難を表出したのである。この研究は、直観と判断のつながり (Figure 1の Link 1) への直接的な研究であり、また、直観的感情の強度を人工的に増加させることは、道徳的判断の強度に影響することを示していると考えられよう。

社会的直観者モデルが引き起こした新しい流れ

以上のように、Haidt はそれまでの理性論者モデルに対して、直観がまず先に生じるとする直観者モデルを提唱したが、このモデルは本論の冒頭で述べたとおり、多くの議論を引き起こした。ここでは、Haidt がモデルを提唱した Psychological Review において、Haidt 論文に対するコメントを述べた Pizarro & Bloom (2003) の反論を取り上げ、それに対する Haidt の反論についてみてみることにする。

(1) Haidt の社会的直観者モデルへの Pizarro & Bloom (2003) の批判

Pizarro & Bloom (2003) は、Haidt が主張した多くの部分に共感するとし、心理学が過度に推論に依存してきたことに同意している。また、理由によって自分でも正当化することができない基本的な道徳的直観があることにも同意している。そして、Haidt が「我々が何をなぜ感じるのかの理由については、ほとんどの場合、意識していない」と結論付けたのは確かに正しいとした。

しかし、彼らは、我々がある種の状況（赤ちゃんを殺す、肝試しで性的交渉をすることなど）にすばやく自動的に反応することは正しいとしても、現実世界では、道徳的問題で葛藤し、すべき正しいことを決定しようとしていることが多いと主張している。以下のような直

観よりも推論によってその道徳性が決まっている例をあげている。

- ・ 公民権運動のときのアメリカ南部における黒人と白人の子どもが直面した論理を中心とした道徳的葛藤
- ・ 妊娠中絶を行うかどうかの決定をしている若い女性
- ・ 幹細胞の研究は許されるべきなのか
- ・ 大学院生が労働組合に加入することの許容について
- ・ アメリカ政府の奴隷制の賠償について
- ・ 私はいくらチャリティーに寄付すべきなのかについて
- ・ 仕事と家庭との適切なバランス

このように、現実世界では、道徳的推論が道徳的判断の本質であると主張している。そして、この主張は「我々の行動と判断のほとんどは、実は自動的になされている (p. 819)」ものであり、熟慮した推論は統計的にまれであると主張した Haidt と完全に反対するものと述べている。

つまり、「社会的直観者モデルはかなりの利点があるが、道徳的認知のいくつかの中心的側面を間違っている。道徳的直観は、意識的熟慮によって形成されており、この熟考は我々の道徳的判断における中心的役割である」としたのである。

(2) Haidt (2003) による Pizarro & Bloom (2003) の批判への反論

Pizarro & Bloom (2003) と Haidt は、道徳性心理学の分野は大きく更新される必要があるという全体図については同意しているようである。しかし、Haidt の主張が一般的かどうか、現実世界に一致しているのかどうかについて意見が異なっている。

Pizarro & Bloom (2003) は、実験室の外で起こっている、人々が直面している現実的な道徳的ジレンマを見ると、人々が推論を使っているという明らかな証拠があると論じた。Haidt もジレンマに直面している人々にインタビューを行った場合は確かにそうであると同意している。しかし、Haidt はそれがどれほど一般的であるのかと疑問を

投げかけ、それに答えられる証拠は、現時点では見当たらないので読者自身のことに置き換えて考えてみてほしいという。彼は、我々が去年1年で道徳的問題に葛藤した回数を、新聞を読んだり噂話をしていたり運転をしているときに感じた道徳的判断の合計回数と比較してみると分かるかと述べている。Haidt の予想では、多くの人は、道徳的問題に苦しんだ数は日常生活での道徳的判断の100分の1にも満たないのではないかと主張している。

最後に、Haidt は Haidt (2001) の論文を書いた後に起こったアメリカの同時多発テロとその後のアメリカ人について述べている。彼は、このような現実的な出来事の中、アメリカ人は、民族プロファイリングや公民権の制限やアフガニスタン市民の死亡の正当性など道徳的問題の範囲の決定が緊急に必要となる事態に直面したと述べている。しかし、多くのアメリカ人は役割取得をして、テロリストの立場から攻撃について考えたりはしていないし、テロリストに対して恐ろしく暴力的な強い感情を持っているという。このように、現実が起こった出来事からも、我々が日常生活で理性的な道徳的推論を行うよりも直観に動かされていることの方が多いのではないかと述べている。

つまり、Pizarro & Bloom (2003) の主張した道徳的直観は道徳的ジレンマにおいてスターティングポイントであり、意識的な道徳的推論は最初の直観を作るために有用でありうるかもしれないということは、論理的には正しいと認めている。しかしながら、現実的な回数を考えたときの有効性と、道徳的推論が最もよいモデルであるかどうかについては同意できないと述べている。そして両者が研究していき、道徳性心理学を更新していきたいと結んでいる。

まとめ

以上見てきたように、道徳性心理学は理性論者モデルからのみで論じられることから脱皮する必要があるということは同意されているようである。社会的直観者モデルを批判している Saltzstein, H. D., &

Kasachkoff, T. (2004) も、一般的な社会的認知と感情の研究と道徳性研究を結びつけるという道徳性心理学が最も期待されていることを実践した Haidt に感謝を述べている。その上で、Saltzstein, H. D., & Kasachkoff, T. は、道徳的決定／判断の過程は、反復的過程ではないかと考え、その反復によって直観的過程はさらに論理的で意図的なものと混ざり合うと考えている。このことから、彼らも直観的過程を全て否定しているのではなく、直観的過程も意図的過程も両方を必要であると考えているといえる。しかしながら、現在もまだ社会的直観者モデルには批判も多く、そのまま受け入れられてはいないといえる。

最初に児童の道徳的判断についての研究を行ったといわれる Piaget (1932) から意図的・理論的な推論中心の研究が80年近く活発に行われてきている。一方、Haidt が社会的直観者モデルを提唱してからはまだ10年も経っていない。したがって、意図的理論的過程と非意図的直観的過程がどのようにして人に道徳的な判断や行動をさせるのかについての融合された研究と議論は、これからかなり長い時間が必要であると思われる。

参考文献

- Batson, C. D., Engel, C. L., & Fridell, S. R. (1999). Value judgments: Testing the somatic-marker hypothesis using false physiological feedback. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1021-1032.
- ダマシオ. (2000). 生存する脳—心と脳と身体の神秘. 東京: 講談社.
- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001) An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*. **293**, 2105-2108.
- Hauser, M. D., Cushman, E., Young, L., Kang-Xing J. R., & Mikhail J. (2007) A dissociation between moral judgments and justifications. *Mind & Language*. **22** (1), 1-21.
- Haidt, J. (2001) The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*. **108** (4), 814-834.

- Haidt, J. (2003) The emotional dog does learn new tricks: A reply to Pizarro and Bloom (2003). *Psychological Review*, **110**, 198-198.
- Haidt, J. R. (2004) The emotional dog gets mistaken for a possum. *Review of general psychology*, **8 (4)**, 283-290.
- Piaget, J. (1932) The moral judgment of the child. London. (大伴茂訳. (1956). 児童道徳判断の発達. 同文書院.)
- Pizarro, D. A., & Bloom, P. (2003) The intelligence of the moral intuitions: A reply to Haidt (2001). *Psychological Review*, **110**, 193-196.
- Saltzstein, H. D., & Kasachkoff, T. (2004) Haidt's moral intuitionist theory: A psychological and philosophical critique. *Review of General Psychology*, **8**, 273-282.
- 高橋丈司. (1988). 道徳性の発達. 発達社会心理学講座 1 —社会的行動の発達—. 古畑和孝編. 学芸図書.
- Wheatley, T., & Haidt, J. (2001). Hypnotically induced disgust makes moral judgments more severe. Manuscript in preparation, University of Virginia.

謝辞

本論文の作成にあたり、武庫川女子大学教育研究所・大学院臨床教育学研究科の河合優年教授にご指導いただきました。心から御礼申し上げます。